

上演4 青森県代表 青森県立青森中央高等学校 作 畠澤聖悟

「熊のことならおもしろい」

講評文

宮城県宮城第一高等学校 伊藤佳奈

「共生」について考えさせられる作品だった。

宮沢賢治の『なめとこ山の熊』と、人と熊の共生についての問題が重なり合いながら物語が展開していた。大道具はほとんどなく、山の木々やインターネットでの批判までもが身体表現で表されていた点が印象的だった。昔話と現代がつながる場面で歌われる詩的な歌は、宮沢賢治らしい神秘的な空気を生み出し、黒を基調とした衣装によって物語の核心に集中できた。

昔の小十郎は、熊の立場に寄り添い、申し訳なさを抱えながら生きるためにマタギとして熊を獲っていた。一方、現代のカナデは父を熊のために失い、世間からの批判や生活の変化を受けることで、命を奪うことへの抵抗を次第に失っていく。

国防の授業で、生徒が観客に向かって銃を構える場面では、対立が生まれれば自分たちも簡単に狙われる側になることを突きつけられ、恐怖を感じた。OKPの社員たちの激しいダンスは、命や共生への感覚が麻痺しているように見え、危機感を覚えた。二人の違いから、立場や考えの違いで線引きをし、自分を正当化することの危うさを感じた。人間の都合での熊の駆除だけでなく、互いに正義を立てて、平和のために人を害する戦争や、身近な人間関係にも同じ構造があり、私自身の在り方も考えさせられるものだった。

物語の最後、月と、スマホのライトによる、こぐま座が広い夜空に浮かび、カナデと立場の違いを越えて熊と対等に生きようとした小十郎の姿が重なって見えた。命の重みを決して忘れる事なく、相手の立場に立って考えることが、本当の共生なのだと思う。